平成28年5月1日発行 第47巻 第4号 毎月（奇数月）1日1日発行 昭和46年1月27日第3種郵便物認可 ISSN 2424-0826

地域保健

5
2016

●座談会
変革期における保健師のビジョン

●特集
次世代に伝えたい保健師のスキル

地域保健
The Japanese Journal of Community Health Care【Vol.47.No.4】
2016 5月

CONTENTS

《表紙イラスト》
山本まもる

「ポッカポカ村。
何処にあるの？
それはヒミツ…」

6 【座談会】
変革期における保健師のビジョン

【出席者】
中板育美さん（日本看護協会）＝司会
佐伯和子さん（全国保健師教育機関協議会、日本公衆衛生看護学会）
青柳玲子さん（全国保健師長会）
平野かよ子さん（日本保健師活動研究会）

26 【特集】
次世代に伝えたい保健師のスキル

28 訪問と事例検討は保健師の原点　斎藤恵子（郡山市保健所）
32 スキルの開拓は「どきどき・わくわく」する体験　佐藤玉枝（前・大分県立看護科学大学）
36 個々のスキルは「自立させる」ためにある　田中由紀子（前・神戸市保健福祉局）
40 住民との協働に保健師の優れたスキルを見る　大場エミ（社会福祉法人恩賜財団 母子愛育会）

2 ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ！ ▶ 柳沼友美子さん（東京都多摩立川保健所）
46 〔新〕2025年問題に備える～みんなで取り組む「地域づくり」 ▶ 埼玉県和光市（前編）
54 ピープル ▶ 稲葉 剛さん（一般社団法人つくろい東京ファンド代表理事）
58 活動報告 ▶「柏市電子母子手帳サービス実証事業」から見えてきたもの
72 理解して生かす保健師用語 ▶ 政策形成
74 REPORT ▶ 第4回日本公衆衛生看護学会学術集会
63 NEWS
90 情報BOX
96 次号予告／奥付

連載
44 〔新〕Integrated Health のすすめ《第1回》／今 知美
52 ESSAY 国際保健《第13回》／松田正己
68 保健師のための閑話ケア《第64回》／藤本裕明
76 中臣さんの環境衛生ウオッチング《第49回》／中臣昌広
80 〔新〕地域保健で求められるソーシャル・キャピタル醸成事業〔隔回連載〕《第1回》／佐々木 亮平、岩室 紳也
86 言葉と発達 いまどき子育てアドバイス《第223回》／中川信子

やぎぬま・ゆみこ

柳沼友美子さん

●東京都多摩立川保健所 保健対策課（※3月取材時）

「その人の幸せのために何ができるか」私は、縁の下の力持ちになりたい

担当地区の「武蔵村山市民総合センター」前にて

文:太田美由紀（ライター）写真:C.Kent

座●談●会

変革期における保健師のビジョン

求められる役割と人材の育成

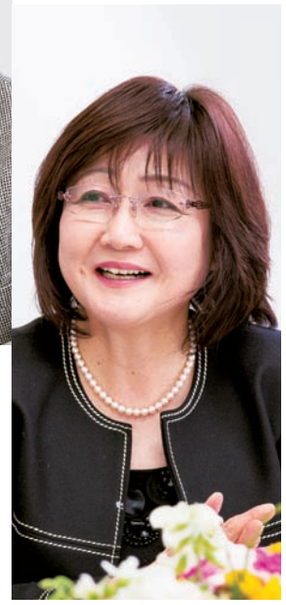
地域保健で新たな潮流が生まれている。地域包括ケアを推し進める動きが本格化し、医療・介護・予防・生活支援などついて、さまざまな立場の人が協働しながら取り組む体制がつくられつつある。一方で、産業界が参入し、行政とのコラボレーションが進むなど、保健師を取り巻く環境は大きく変わってきている。そうした中で、公衆衛生看護の担い手である保健師は、いかにしてアイデンティティーを保ち、力を発揮できるのだろうか。

保健師各団体の関係者にお集まりいただき、変革期における保健師像を語ってもらった。

◆日本看護協会
中板育美さん
司会

◆全国保健師教育機関協議会
日本公衆衛生看護学会
佐伯和子さん

◆日本保健師活動研究会
平野かよ子さん



◆全国保健師長会
青柳玲子さん

特集

次世代に伝えたい 保健師のスキル

個人から集団、地域まで、支援対象が幅広くある保健師のスキルは実に多様で、個人的経験から生まれた「知恵」の結晶でもある。かつては日頃の訪問活動の中で、あるいは職場の先輩と行動を共にする中で、こうしたスキルの伝承が保たれていたが、近年は分散配置で先輩から後輩へ伝授する機会が少なくなった。また、基礎教育の問題や業務分担制などの影響で習得も難しくなっている。

特集では、ベテラン保健師の方々に自らの経験を振り返り、「後輩に伝えたい！」と思う大切なスキルについて、自由にまとめてもらった。

P28 訪問と事例検討は保健師の原点
◎斎藤恵子（郡山市保健所）

P32 スキルの開拓は「どきどき・わくわく」する体験
◎佐藤玉枝（前・大分県立看護科学大学）

P36 個々のスキルは「自立させる」ためにある
◎田中由紀子（前・神戸市保健福祉局）

P40 住民との協働に保健師の優れたスキルを見る
◎大場エミ（社会福祉法人恩賜財団 母子愛育会）

稲葉剛さん

「人間として、住むところがあるのは当たり前のこと」

稲葉さんは、路上生活者やネットカフェ難民への支援を通じて、日本にはびこるハウジングプア（住まいの貧困）の現実を知り、低所得者への居住支援をしながら住宅政策の転換を求める活動をしている。

◉特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい理事
住まいの貧困に取り組むネットワーク世話人
一般社団法人つくろい東京ファンド代表理事

●聞き手……編集部

仕事がなくなると住むところがなくなる

―稲葉さんが言う「住まいの貧困」とは、どのようなことなのでしょうか。

稲葉　日本国内では、1990年代前半のバブル崩壊後から徐々に貧困が広がり、路上生活者が増加しました。私は2001（平成13）年に湯浅誠と「自立生活サポートセンター・もやい」を設立し、ホームレス状態にある人が路上から抜け出し、アパートに入居するための支援を始めました。当初の私たちの支援対象は、建築・土木現場で働く50、60代の日雇い労働者がほとんどでしたが、03（平成15）年ごろからネットカフェなどで暮らす20、30代の非正規労働者の相談が多くなりました。それまでは、支援対象にアプローチするには路上、公園、河川敷に会いに行くのが通常でしたが、そのころからネットカフェなどを利用した、Eメールでの相談が増えてきたのです。

ホームレスの問題とネットカフェ難民の問題は、一見すると寝ている場所も違うし、年代も違うため、別々の問題として捉えられがちです。しかし、実際に相談を受けている立場からすると、両方とも「住むところがない」という点では同じです。そこで私はこうした住まいがない人たちの問題を「ハウジング・プア」と名付けて、それをキーワードに活動してきました。

―一見豊かなこの国では、住むところがない人がたくさんいるのですね。

稲葉　08（平成16）年の「年越し派遣村」では、海外からの取材も多かったのですが、そのときヨーロッパの記者からよく言われたのが、「日本では、なぜ仕事がなくなると住むところがなくなるのか」ということでした。あのころは世界同時不況でしたので、どこの国でも失業した人はたくさんい